

## 刀根康尚の音楽活動についての解釈と位置付け

馬場省吾（横浜国立大学）

---

本発表では、日本生まれ、アメリカ在住の音楽家・刀根康尚（とねやすなお、1935-）の制作した音楽作品について、制作意図と方法論を取り上げる。まず、刀根が渡米後に制作してきた作品群が、CDやMP3といった音響再生産メディアを生産メディアへと変化させていることを考察する。そして、刀根が1960年代から2000年代に制作した作品群のディテールと本人の著述を整理し、刀根がジョン・ケージ(John Cage, 1912-1992) 的な実験音楽以降の系譜の中へ位置づけられることを示す。

論考として第一に、1980年代以降の刀根の音楽では、人々が普段使用している音響再生産メディアのあり方がどのように変化しているかを考察する。例えば、《2 台の CD プレーヤーのための音楽 *Music For 2 CD Players*》(1986) では、CD に傷をつけてプレーヤーで再生させることで、スキップやエラーを多数発生させる音楽を演奏した。その演奏では、「全く予期しない音が生まれただけでなく、コントロール機能が乱されて、CD の進行も予測できなくなった」という（同様の手法で制作された CD 作品に、《Solo For Wounded CD》(1997) がある)。CD という音響再生産メディアに処理を加え、演奏者（刀根）本人すら予測ができないような音を発するメディアへと変化させることで、この作品においては再生産メディアが生産メディアへと変貌していることを示す。

第二に、刀根がケージ的な実験音楽以降の系譜の中へ位置づけられることを示す。刀根康尚は、1960年代に音楽活動を開始し、初めは日用品等を用いた集団即興演奏を行い、その後は図形楽譜、ワードピースに基づく作品の作曲・上演を行っていた。1972年に渡米した後、1985年頃からデジタル・ノイズを用いたライブパフォーマンスやCD作品のリリースを多数行っている。1980年代以降に制作された刀根の音楽作品の多くは、ハーモニー、一定のリズム、メロディーなどの意図された音の構成を持たない。こうした刀根の音楽制作の背景には、ジョン・ケージの「不確定性の音楽」があるということがいくつかの先行研究によって指摘されており、本人も多々そのように著述している。ケージは、作者が考えた意図や感情の表象という音楽のあり方を否定し、音を「あるがまま」にすることを目指し、作曲を行っていた。刀根が先のような手法を用いて音楽を制作することは、このようなケージ的な考え方と結びついていると考えられる。だが、特に日本では、刀根の制作活動全般がケージ以降の実験音楽の問題圏で制作を行っていることを論じた研究は非常に少ない。また海外の研究においても、刀根が1960年代からケージ的な考え方を共有していたことを検証した論考は未だ少ない。そのため、刀根康尚のケージ的な考え方は1960年代に起源があり、その後のデジタル・サウンドを用いた制作と結びついていることを論考する。